

コロサイ人への手紙

パウロはイエスをよみがえりの主と宣べ伝えたため何度も投獄され

この手紙もそのうちの1回の投獄中に書かれました

パウロはこれを自分が建てたのではない教会の

会ったことのない人々に宛てて書きました

コロサイ教会はパウロの同労者で

コロサイ出身のエパfrasが建てました

エパfrasは獄中のパウロを訪ね

教会がうまくいっていることを伝えましたが

同時に文化的な圧力があって

信徒たちがイエスから離れそうだということも話しました

そこでパウロはこの手紙を通して

エパfrasが伝えた問題についてコロサイの信徒たちに語りかけ

ますます熱心にイエスに従うように勧めたのです

この書の構成と話の流れは非常に明快です

まず冒頭は

高くあげられたメシアとしてのイエスに焦点を当てています

次にパウロは自分の牢獄での苦しみは

そのイエスのためであることを示し

次いでコロサイ人をイエスから引き離そうとしている

周りのプレッシャーに言及しています

そのあとでパウロはイエスのよみがえりが

道を開いてくれた新しい生き方について述べます

この書は2つの祈りで始まります

パウロはまず

コロサイ人たちについて神に感謝をささげています

それは彼らが

イエスがもたらす新しい創造への希望のゆえにイエスに忠実で

神と人とを愛していることをエパfrasから聞いていたからです

彼らがさらにイエスについての知識と理解を深めていくように

祈り続いてコロサイ人や私たちが

そうすることの助けとなるような詩を書いています

この十字架につけられ高くあげられたメシアについての詩こそ

1章の中心です

この詩には2つの対になる段落があって

そこでは創世記と出エジプト記

詩篇と箴言からの言葉やイメージがふんだんに使われています

最初の節ではイエスが真の神のかたちであり

彼にあって神の性質と計画が人として受肉したと書いてあります

イエスは先に生まれた方でありこれは旧約聖書からの用語で

イエスがすべての被造物の上に君臨する王であると述べています

イエスは唯一の真の創造者である神と同一の存在であり

この方によって

すべての力と権威がある霊的な存在や人間は造られました

メシアであるイエスこそ創造者であり全世界の王なのです

次の節では

イエスは新しい創造をもたらす方でもであると語られます

イエスの民として新しい人になった者たちを新しい体とするなら
イエスはその頭でありよみがえりのイエスの存在は
その新しい人たちの原型です
神はご自分の栄光をイエスのうちに宿らせ
イエスの死とよみがえりを通して
人間すべての霊的な存在全被造物と和解をされるのです
これは驚くべき詩でありパウロは手紙を書き進めながら
ここに書かれている内容に何度も触れています
まずこの詩に書かれている真実が
彼の獄中生活をいかに変えたかを語っています
パウロはイエスはよみがえりすべてのものの王であると
ギリシャとローマに宣べ伝えたため捕らわれました
パウロはこれを敗北ではなく
イエスの苦しみにあずかる愛の行為だと考えました
この試練は喜ばしいことであると言うのです
イスラエルのよみがえりのメシアが
多民族からなる新しい家族を作るということを知らせたために
投獄されたのです
さらに神の栄光がイエスに宿り
イエスは多民族の家族の中に宿っています
パウロはこれをあなた方のうちにおられる
メシア栄光の望みと言っています
パウロは次に
コロサイ人をイエスから引き離そうとしていた圧力について述べました
彼らは神秘主義の多神教からの敵対と
トーラーの戒めを守らなければという
プレッシャーの板挟みになっていたのです
新しくクリスチャンになったコロサイ人たちは
ギリシャやローマのそれぞれ違う領域をつかさどる
神々を拝みながら育ってきた人たちで
イエスのことを単にその中の一つとして加える者も多くいました
またユダヤ人クリスチャンからは
トーラーの掟をすべて守ってメシアへの献身を完全なものにせよ
というプレッシャーもありました
パウロは特に食事規定聖なる日と決められた日
割礼について書いていますが
この問題はガラテヤ人への手紙の中で語られていたことと
よく似ています
パウロから見ればこのどちらの誘惑に屈することも妥協であり
イエスがどんな方で彼らのために何をしてくださったかを
充分理解できていないということでした
コロサイ人たちはかつて
パウロが言うところのこの世の諸々の霊に怯えて暮らしていました
しかしイエスのご自分の死とよみがえりを通して勝利され
彼らをそれらの霊への恐れから解放したのです
またイエスが私たちのために律法を成就しました
律法にはそもそも自己中心的な人間を造り変える力はなかったのです

イエスがご自分の命死よみがえりにおいてしたことは完全であり
律法を行うことによって付け足さなければならないようなことはありません
イエスこそトーラーの戒めが指し示していることそのものだからです
イエスの信徒は律法の代わりに
イエスのよみがえりの力によって造り変えられるのであり
パウロは手紙の続きでそれについて述べていきます
イエスに従うとはイエスの様に新しい人になるということです
彼らの命はよみがえりのイエスの命につながっているからです
だからこそパウロはコロサイ人たちに
メシアが神の右の座に着き君臨している上のものを求めなさい
といったのです
パウロがここで言っているのは
地上を去って天国に行く日を考えなさいということではなく
イエスは今すべての被造物を天から治めていて
いつの日かイエスがそこから戻ってきてすべてを造り変えるということです
パウロはあなた方の命であるメシアが現れると
あなた方も彼と共に栄光のうちに現れますと説明します
それでパウロはやがてなるであろう新しい人として
今を生きるように勧めているのです
パウロは古い人の特徴は
破壊的な言葉や歪んだ性だとしています
古い人はイエスと共に死にあわれみと寛容
赦しと愛に特徴づけられる新しい人がそれにとって代わったのです
新しい人は民族的な壁も社会的な壁も乗り越え
パウロが言うところのギリシャ人もユダヤ人もなく
割礼の有無もなく奴隷も自由人もなく
メシアがすべてであり
すべてのうちにおられるその様な民を作ります
その後パウロは
とても具体的に新しい人が家庭内でどうすべきかを示しますが
1世紀のローマの家庭とは非常に権威主義で
家長である男性が妻や子奴隷たちの命を握っていました
しかしクリスチャン家庭はそうではなく
よみがえりのイエスが真の主であり
主にあって妻は夫に責任をゆだね
夫は妻を愛し自分より妻の幸福を求めることによって
イエスに従うのです
イエスが主である家庭では子どもは親の所有物ではありません
子どもは成熟して親を尊敬するべきものであり
親は忍耐と理解をもって子どもを育てるべきです
奴隷であるクリスチャンは本当の主人はイエスだから
人間の主人をも敬うようにとされています
また奴隷の主人であるクリスチャンは
奴隷は自分の所有物ではなくイエスの体に連なる仲間であり
尊重され愛されるべき存在であることを理解しなければなりません
パウロは実はここできわどいことをしています
自己犠牲の愛で世を治めるイエスを中心に

ローマの基本的な制度を変えようとしているのです
パウロは家庭の枠組みを完全に否定しているわけではありません
が統べ治めるメシアが求める家庭のあり方は
コロサイに住むローマ人には不可解なことだったので
それはこの手紙の結論部分に最もはっきり表れています
祈りの要請をしたあと
パウロはクリスチャンである奴隷と主人に関する
指示を実行させようとしています
この手紙を配達して読んで聞かせるのはティキコですが
オネシモという人物が彼に同行しています
オネシモは
コロサイのクリスチャンでピレモンという人の奴隷でした
そしてピレモンに宛てた別の手紙を読むと
オネシモが逃亡奴隷だということがわかります
それは投獄されて当たり前な罪でしたが
パウロは教会全体にオネシモを主にあつて誠実な愛すべき
兄弟として歓迎するように頼んでいます
そしてピレモンへの手紙で
パウロは彼をもはや奴隷としてではなく
兄弟として受け入れるようにと言っています
何とも説得力のあるエンディングです
コロサイ人への手紙を通して
パウロは私たちに
解放をもたらすイエスの愛と支配は
すべてに及ぶということを示しているのです
私たちの苦しみ妥協したいという誘惑
道徳的な人格家庭における力関係などは
すべて見直され変容されなければなりません
私たちはイエスが死からよみがえった以上
新しい創造がすでに完成したかのようにして
今の時代を生きるべきだからです
これがコロサイ人への手紙です

【要約】

パウロはイエスのよみがえりを宣べ伝えたために投獄され、この手紙もその際に書かれた。手紙はコロサイの信者たちに向けられ、エパfrasが建てた教会に文化的な圧力と信仰の課題があることを伝えるために使われた。手紙の中で、パウロはイエスの優越性、自身の苦難、そして信者たちへの助言を述べており、特にイエスのよみがえりの重要性を強調。手紙はイエスに従うこと、信仰の新たな生き方、家庭内の関係について具体的なアドバイスを提供し、クリスチャンとしての価値観を強調している。手紙は奴隷と主人の関係をも変え、愛と奉仕に基づく新しい秩序を提唱。パウロはクリスチャンの共同体を支持し、信仰に基づいた新しい生活様式を奨励している。この手紙を通じて、イエスの支配はあらゆる領域に及び、イエスの愛と解放によって私たちは新しい生き方を歩むべきだと説いている。